

天 災

聖人が鎌倉の小町の辻で説法を開始せられてから、三年目の建長八年の二月に暴風雨洪水があり、八月には風雨の大害があり、九月に入ると、赤疱瘡の流行があつた。年号を改めたらなんとかならうと十月五日に改元されて康元元年となつたが、翌康元二年の二月十日に太政官庁が火災にあつたので再び改元して正嘉元年となつた。

正嘉元年の五月十八日に関東地方、殊に鎌倉に大地震があつた。

五月から六月にかけて大旱魃、加うるに、日蝕月蝕が引続いて人心の不安が打ちつづいた。

しかるに八月二十三日の戌亥（午後九時すぎ）の刻に轟然たる地なりがしたかと思つたと、前代未聞の大地震が襲来した（聖人は立正安国論の奥書に、去ぬる正嘉元年戌亥の刻の大地震を見て之れを勘う、と言われておる程の大地震である）当時の記録によれば、神社仏閣のごとき大建築物で転倒倒壊せざるものなしとある。民家はすべてぺちゃんこにつぶれ、山丘は崩れ井水はかれ、大地の裂け目から水が噴き出るかと思つと、中下馬橋の辺りでは数十尺の穴が大地にあり

て、中から青い焰が舌をはくという凄まじきであった。夜中の一瞬の出来事なので、死傷の多いのは想像を絶するものがあつて、鎌倉だけでも死者の数は二万人といわれておる。

余震はその後も引続き起つて、二十五日には余震とはいえぬ、大きなゆりかえしが五、六度も一日中にあつて、鎌倉中の人々は生きた気持もなかつた。

九月四日又々申の刻（午後四時すぎ）に地震。

十月十三日には雷電へきれきの音が終夜やまず、いなずまのはためきの裡に、鎌倉の海や山が不気味に終夜明滅されていた。

十五日、夕刻には大雨があつて驚かされたが丑の刻（午後二時すぎ）には又々地震があつた。

十一月八日には前述の八月二十三日の程度の大地震が又々あつて、この世の終りかと思わせた。

「国土乱れん時は、先ず鬼神乱る、鬼神乱れるが故に万民乱る」とは仁王経に示すところであるが、これ等の天災は何を意味するかと聖人は経文によつて考えたのである。

大集経と言う経文には三つの不詳事をあげておる。一には穀貴、二には兵革、三には疫病をいうのである。穀貴とは食料の騰貴で飢饉である。兵革とは、兵乱の絶え間のないこと、疫病とは悪病の流行をいう。これ等の不詳事がここ三十年來打ち続いて絶え間がない、加うるに薬師経には七難と言ふことが説かれてある。

七難とは何か

- (一) 人衆疾疫之難
- (二) 他国侵逼之難
- (三) 自界叛逆之難
- (四) 星宿變怪之難
- (五) 日月薄蝕之難
- (六) 非時風雨之難
- (七) 過時不雨之難

をいうのである。

聖人の生年たる貞応元年より立正安国論を述作された三十九年間に天災の度数は、ほぼ天変百八十回、地震百四回、大風雨七十八回、洪水十九回、火災五十四回、炎旱六回、飢饉七回、疫病十六回、騒乱三十六回という数である。

さて經文にはこれ等の天災地異はすべて正しき法に人がそむくことによつて起ると明示されている。

国主が正法に帰依しなければ国は謗法の国となる。諸民が謗法ならば天下もまた謗法の国である。所詮天下をあげて誇法の国となれば諸天は国をすて、善神はすみかを加えて他にうつつてし

まう。この故に魔来たり鬼来たり、災起り難起る。天変地異の起るのも正に当然と申さればならない。

天変地異によつて起るところの原因が誇法にあるとすれば、その退治の方法は明々たるものがある。即ち、正法の興隆である。正法とは何か、法華経である。法華経こそ正に鎮護国家の宝典であり、衆生導利の明経である。法華経の理想とするところは、全世界を通じて一仏乗となす寂光土を、このわれわれのすんでおる土地に建設しようというのである。

すべての人々が法華経を信じて南無妙法蓮華経と唱えるならば、この世の中は仏土となるであらう。仏国土には天変地異もなく、飢饉疫癘もない。万民一同に南無妙法蓮華経と唱えて、妙法独り繁盛せん時には、吹く風も枝をならさず、雨つちくれをくだかず、世は義農の国となり、民は堯舜の民となるであらう。法華経の理想境はここにある。しからばこの理想境に到達する方法は如何。法華経以外の諸経による宗旨を破折せねばならない。天変地異をなくし、飢饉疫癘をこの世からなくすには、法華経以外の諸宗を破折せねばならないという結論に達するのである。